

# PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号



この数カ月、あなた方と分かち合う機会に恵まれて、私はたくさんの話を喜んで語ってきました。

私たちが喜ばせ、喜びと悲しみが混在しているこの世界に生きていることを嬉しく思わせる話もありました。大部分のものが、そうだったと思いますが、私たちはそれらの話から何かを学び、そこには真の道徳というものがあることを学びました。多くのものは神の道徳について語り、私と共に生きてきた人々の信仰の証となるものでした。そして、私はそれをあなた方と分かち合うことができたのです。また、今日の手紙のようにびっくりするような結末のもの

もありません。悲しみを伴い、そしてそれは喜びに変わります。私たちによい教訓を教え、深い信仰の念が現れている話です。

さて、これはとても個人的なものですので、彼女の名前はふせておきますが、この女性の手紙を紹介しましょう。

『拝啓ウイルケ博士』

この話をあなたにしたかったのは、私は悲しんでいる一方で、喜びと感謝の気持ちでいっぱいでもあったからです。2、3日前、私の18になる娘が家に帰ってきて妊娠していることを告げました。彼女は未婚で、彼女の愛している若い男性は中絶をするべきだと言いつけていました。

お陰様で、私たちは以前にこの問題について何度も話し合っていました。で、娘にとって無実の赤ちゃんの生きる権利を守るといふ結論にいたるこ

とはそう難しいことではありませんでした。実際、彼女はその小さき者に自分の身を捧げるようになっており、妊娠がわかった時点で「煙草」を止めたほどでした。以前にも禁煙を試みていましたが、失敗していたのです。しかし、今回はそれは赤ちゃんのためであり、彼女はうまく成功したのです。彼女の恋人は彼女から去って行きました。けれども彼女は、多くの友が生まれて来るべきではないという、そのかけがえのない生命を誕生させるために、必要な生活の変換をしていきます。』

彼女の手紙は続きます。『ウイルケ博士、あなたは正しかったのです。状況は私たちにあって良い方向へと向かっていきました。自分と同じように、彼女のお腹の中にいる生命がかけがえのない神聖なものだと信じている友がいる

ことを知ったことは、彼女にとつて大変な支えになりました。私たちの心の中心にいらつしやる神は、悪魔のどの様な邪悪な力よりも強く、キリストをとおして悪魔を打ち負かす力を私たちは持っているのです。』

そして追伸があります。『私は複数の硬化症を患っています。19年前、私を診ていた産科医は中絶を勧めておりました。私は赤ちゃんを生みたい、そしてきつとその子は神の御加護を受けるだろうと頑張りました。そして、その通りになったのです。当時より私はずいぶん回復しました。中絶しなかった赤ちゃんというのは私が今お話した娘です。私たちは彼女を愛していますし、まだ生まれていない孫をももうすでに愛しています。』

ジョン・ウイルケ

(医学博士)

子どもによせるソネット

真昼の空にも星のあることを  
おとなたちは忘れてしまった  
風の中に小人が踊っている姿も  
もうおとなには見えなくなつた

花は花であり

雲は雲でしかなくて

花びらのなかに眠ることも

雲に乗って走ることもできなくなつた

そんなさびしいおとなたちのために

神様は子どもたちをくださる

子どもはきのこの夢のつづきを話してくれる

そのやわらかな手のひらでおとなの心をあたたため

その清らかなひとみのひかりで

さびしいおとなたちの目を洗ってくれる

高田敏子 『にちよひの母と子の詩集』

## 国内ニュース

《何も分らない

胎児のうちに》

確かに胎児の命を尊重すべきで、その命を殺すことは私たち大人がしてはならないことだと思えます。けれど、子供の誕生を心から望まない人が子供を産んで、その後どうなるでしょう、それは、だれにも分かるはずです。殺すか捨てるかです。

そんなことをするくらいなら、まだ胎児のうちに、の方が幸福だと思えます。何も分からない胎児のうちに…。

(25歳主婦

高知新聞投書)

\*この考えは、一見、人を納得させるかのようですが、実は、とても危険な、自己本位の考え方

だと思えます。また、胎児は何も分らないのではありません。見て、聞いて、感じています。

(プロ・ライフ)

《優性保護法改悪に

反対の声を》

たしかに『胎児の生命尊重』という人道主義的な響きですし、善意でこれを支持される方もおられると思いますが、妊娠、出産そして育児の負担が母となる女性に大きいのしかかる現実を考えれば、『産む』『産まない』の選択はその女性が決めるべきで、妊娠中のできるだけ長い期間、その権利が保障されるべきだと私は思います。

(39歳男性

高知新聞投書)

\* 『胎児は人間である』  
とこのことを認めなければ、いついつ考え方もできるでしょう。しかし『胎児は人間である』と認めるものにとつては、善意で支持するのではなく、真実だから支持するのです。「産む」ということは「生かす」ということであり、「産まない」ということは「殺す」ということです。そんな権利が人間を殺す権利が保障されるというのは、一体、どういふことなのでしょう。か、どういふ社会なのでしょう。

(プロ・ライフ)

## 国際ニュース

『ポーランドで中絶反対案』

「生命は受胎の瞬間から始まるもので、この生命を守る権利を確保するため、中絶は不法とするべき」と80人のポーランド議会議員から成るグループが、この提議を公表した。この提議は、現在取り入れられている一九五六年中絶法を廃止し、また中絶を行った本人及びそれを行った医師に対して3年間の拘禁の刑を課するべきというものである。この提議は、ポーランドカトリック司教団からは支持を受けているものの、男女同権主義を唱えるグループからは反対の声が上っている。

『低迷するシンガポールの出生率』

一九八九年度のシンガポールの出生率に関する調査が行われ、その結果が発表された。それによると、シンガポールの出生率は、人口減少の傾向にある状態に変化をもちたそうと取り入れられた。出生に関する様々な新しい基準の成果もあって当初増加の兆しを見せていた。しかしやはり、下り坂の状態が続いているようである。シンガポール政府は、各家庭に二人以上の子供を設けるよう呼びかけてはいるが、現実には、昨年3月の出生率は10%の落ち込みを見せている。現在政府は方針を変え、結婚を促進することによって出生率を上げようとしているが、この出生減少の最も重要な要因であるといわれる同国

の中絶法に関しては、まだなんの取り組みも行われていない。この肝心の中絶法を無視したシンガポール政府の出生率向上を目指す政策を、『全く意味のない事』とみる見方も多い。

『奨励されるインドの中絶反対派』

「インドにおける中絶反対の協会や運動は、その発展を目指して奨励されていくべきだ。」ヨハネスパウルス教皇は、最近訪れたローマにて、インドカトリック司教団にこのように話した。さらに教皇は「インドにおいて、中絶をはじめ、嬰兒殺しや安楽死を法律で正当化しようとすることは、神聖なものであるはずの生命を汚すことにつながる」とまで付け加えた。

『香港の高い中絶率』

香港で一九八八年に行われた中絶の数は、およそ一万五千件に上り、前年度に比べて20%以上も増えている。そのうち8割は、既婚の女性を対象に行われたとされている。香港では一九七三年、初めて中絶が認められた。この調査によると、一九八八年度に10代の母親に行われた中絶は970件。これは、その当時と比較すると80倍も増えている。

# 読者の声

『絶対に』

反対であります』

絶対に反対であります。また、そのことが罪であり、悪の行為であるとの考えが、現代社会に消えかかっております。あたかも風邪にかかったことのように、一般の病院で「中絶」が行われています。一般の家庭の主婦の中でも、「あそこは墮ろす手術がうまい」などと、とんでもない風潮が蔓延しております。そんな思考をもつ母親に育てられた子供は、同じ罪の繰り返しです。これは早期学校教育の保健に入れておくべきと考えます。中絶が大罪の殺人罪であること、また、生涯において、それにかかわった神の子への罪としての自責の念、罪の呵責の大きさを考える時、ドンボスコの云つ予防教育として、成人に対し

てはもちろん、青少年にレ

ベルを下げ、「なぜいけないことか」を徹底して、あのコカコーラのように日本中、世界中に、正しい勢力の考えを普及すべきと思いました。

1990 5 2

(横井公子)

『胎児はもつとも』

弱い存在』

中絶という言葉は、他人ごとのような気がしていた。胎児と呼ばれる、まだ母親の体内に宿っている時、自分達完成された人間は、心のどこかで、胎児は人間ではないと思っっている。人間だと思っっているも、完成された人間のように話せる訳ではないし人権がある訳ではなし。そんな意味で、自分達は、胎児に対して一種の差別的行為を行っていると思っ

思っ

世界では、いや日本でも、差別と呼ばれるものもいくつもある。しかし、胎児の場合は、小さくても完成した人間である。まだ青い空も緑の空気も味わったことのない胎児・・・。相手が弱い存在だと胎児の気持ちなど考えないで大胆な行動に出る。

しかし、ちょっと止まって考えてみれば、「胎児だって人間だ」と気が付くはずだ。

(高2 男)

『今妊娠してしまったとすれば・・・』

私たちはまだ高校生であるから、もし、今妊娠しても赤ちゃんを生み育てることは大変なことだと思っ

しかし、生命というのは、この世の中で一番大切なものです。だから、今私が妊娠してしまったとす

れば、学校をやめてでも生

み育てるだろうと思っます。無責任に「中絶」はしたくないし、生まれてくる赤ちゃんを大事にしたいと思っ

生命というのは簡単につくり、簡単に投げつけてはいけないものです。責任を持つる人が、生命を生み出すものだと思っ

代々の生命があつてこそ私たちの生命があるのだから。

(高3 女)

「LOVEの責任・考えはじめた子供たち」より  
『生命尊重ビデオ』

編纂委員会

## 改革運動

中絶のない社会をめざす改革運動は、長く難しい、一晩で勝利を得られないようなものではない。その道を妨げるものは、自分達で抑圧的な内容を公表しながら、私達の信念を他人に押し付けるなという中絶支持者である。私達は、人間の不完全な判断にではなく、神にのみ責任を持つということをお忘れではない。

私達は、中絶に反対する人々の数は多くの人が考えている以上に多いと信じている。はっきりと意見を述べる人以外にも、反中絶が流行遅れである現代、それを発言するのを躊躇する人がいる。しかし、中絶に反対する人の過半数は不正を家族や友達に言い表しはするが、それ以上のことはしない。こうい

## 『ゲイリー・ベルの話』

人達は、全体の状況が直すには絶望的であり、不可能である、としばしば感じ、全く何もしない。そして皮肉にも、彼らの助けと支持がこの状況に希望を与えるかも知れないのである。生命を尊重する者（プロ・ライフ）になることが、多くの活動家にとって趣味か気晴らしでしかないと考えている人達は、人間への断定的な関心が私達全てにかかる義務、そして責任であることに気が付かない。私達は決して他の人の苦痛に無関心であってはならない。

中絶が間違っていると知っていて、かつ、活動しない人達は、私達を襲った罪深い墮落の責任の多くを負わなければならない。沈黙は致命的である。

『人がなすべき善を知りながら、それを行わないのは、その人にとって罪です』（ヤコブ4：17）

だから、この死への過程

を変える力を他の人に期待してはいけない。あなたはこの仕事のために、あなたの役割を独特に準備されているのである。神はあなたに他の誰にも与えていない、皆に分担すべき才能を与えたのである。このプロ・ライフのメッセージを広めるといふ挑戦を受けなさい。

我々の努力がその真価を認められず、もつと悪い場合には、非生産的に見えても、決して信念を失ってはいけない。なぜなら、時によつては、敗北が切迫して思える時こそ勝利が近いのであるから。

日本プロ・ライフ・ムーブメント  
（中絶に反対する運動）  
代表者：  
ノボトニー・ジェリー  
ONI

中絶問題。我々男達はこの問題について、長い間沈黙を保ってきました。そのため、中絶問題をめぐる様々な形の悪口の矛先は男達に向けられてきました。たくさんの人達が非難するのは我々男性軍です。

「男達は中絶問題に関心を示さない。気にも留めはしない。」と。しかし、これは事実とは違います。実際私は全国から集まった男性達と話をしました。その経験からもここではつきりと言えます。「我々男達も中絶に感心をもっている。」と。これからお話しする私自身の体験談は私の心に傷を残した悲劇的な出来事でした。私がこれをお話しようと思ったのは、

たくさんの男性がお腹の中にいる子供を中絶から守る権利を与えられてもいないのに中絶をめぐる

責任を責めたてられ、それに耐えていかねばならない現実を皆さんに知って欲しいからです。また、社会全体がいつの日か我々のこのような痛みを理解して、このような間違っただけの現実を変えていくよう努力すること願ってやみません。

忘れもしません。あれは一九八一年の夏のことでした。仕事を終え、いつもより少し早く家に帰ってみると、妻が泣いているのです。一体何があったのか：心配と恐れを感じながら妻をなだめて聞きました。10分もするとやっと落ち着いて話を始めましたが、妻の口から出てきた言葉は信じられないような、できれば聞きたくなかったようなことでした。「中絶をした」と言つのです。驚きのあまり声も出ま

んでした。妻が妊娠していたことすら知らなかったのですから。自分の子供を失ってしまった悲しみから、利用されたような、自分がちっぽけでどうしようもない人間であるような、何とも言い難い孤独感で一杯になりましたが、私は妻を愛していましたし、妻が私を必要としていることが分かっていますから、気を取り直して必死で妻をなだめて落ち着かせようとしました。しかし心の中は今までにないほど傷つきボロボロで、独りになってから何時間も声をあげて泣いたのでした。それからおよそ一年が過ぎ、妻はまた妊娠しました。今回はちゃんと妊娠したことを打ち明けてくれ、私は父になる喜びで一杯でした。ところがなんと妻はその子もまた中絶すると言つのです。私は必死で妻に頼みました。頼むから産んでくれ、責任を持って

い父親になるよう頑張るからと。いざとなれば養子に出してもいい、ただその子を中絶で殺すことだけはしないでくれと。しかし妻の返事はこうでした。

「あなたができることなんて何もないのよ。」私に何が言えたでしょう。彼女の言う通りでした。こうして

私はこの子もまた失ってしまつたのです。虚しさ、虚脱感、絶望感、落込み、

胸の痛み……私のその時の気持ちをどう表現したら分かつてもらえるでしょう。言葉ではとても言い

表せない何とも言い難いやりきれない気持ち、それは耐え難いものでした。初めて中絶を経験した時から、私はずっと心配や恐怖

感というような妻の気持ちを理解しようと努めてきましたし、それに自分の

子供を中絶してしまつたなんて嫌な過去は早く忘れてしまいたかつたので、

妻も私もそのことについて

では一切口にせず、まるで何事もなかつたように今まで通りの生活を送るよう努めました。しかし、だめなんです。何かが違うんです。どんなに必死で努力しても忘れることはできず、胸の痛みをかき消すことは無理でした。

そのうち妻は私のせいで夜眠れないと文句をいうようになりました。私が寝返りを打つたりして一

晩中動き回るのでとても眠れないと。そんな時の私の反応は、笑つて済ませて

しまふか、いろいろと言いつくをするかでした。今夜は暑すぎるからとか、仕事のこと

で色々考え事があるからとか。とても本当のこととは言えません……中絶の

ことで悪夢にうなされて

いるなんて。毎晩のように、妻が中絶したあの忌まわしい日の悪夢にうなされ、その度に胸はあの日と同じようにキリキリと痛

むのです。毎晩夜中に目が

覚め、憂鬱な気分になる日が続きました。それまでずっと私はただ忘れたくないで、必死で忘れようとしてきたのですが、そのうちだんだんと気付き始めたのです……忘れることなんて決してできはしないということに。だから自分

にそう言い聞かせるしかありませんでした。忘れることなんてできないんだ、

これからずっと一生この胸の痛みを引きずって生きていくしかないんだと。

私は妻の中絶を二度も経験したんです。一人目の時は手遅れでしたから仕方

ありませんでした。私が知つたのは既に妻が中絶した後だつたのですから。

しかし二番目にできた子のことは知っていて、それでも何もできなかったのです。妻を説得することも

できず、わが子を見殺しにしてしまつたのです。父親としての責任が果たせな

かつたことから、罪悪感と

屈辱感を感じずにはいられませんでした。自分の子供一人守れなかつた、父親失格という気さえしていました。妻が選んだ道はどう考えても間違つていると分かつていましたから、

神に頼る一心で祈りました。忌まわしい過去は早く忘れさせてくれるように、

この胸の痛みを早く取り除いてくれるように、妻

が、犯した過ちを、そして私自身の赦しをこうべく

神に祈りを捧げました。誰かが何かをしなれば、そう感じてはいましたが、一

体誰が、何が、できるといつのか……孤独感と自分の無力さをしみじみと感じ

ずにはいられませんでした。家族の死ははじめてではありません。子供の頃に

経験したことはあり、その時ももちろん胸は痛みました。でもこの自分の子供

を中絶で失つたキリキリとした胸の痛みはずっと深く、比べものになりませ

ん。しかしそれでも妻との生活を今まで通り続けていきたくつたし、そうしよう

と努力したのです。この生活が今まで通り何事もなかつたようになんてい

くわけはないと内心気付いてはいましたが、一生妻

を愛し慈しむという結婚式で立てた誓いは守るべき

だと真剣に思つていましたし、実際今でも妻を心から愛していました。

しかし、そのうちついに私達の夫婦生活に暗い陰

りが見え始めたのでした。妻の中絶のことで心のうちでモヤモヤと溜つてきたもの、それをこれ以上自分の中で押えておくことが不可能になつてきたのです。妻と話し合いたかつたのですが、妻は拒絶しました。中絶の話はしたくないと。こうして、押さえつ

た。どうすることもできず、時々、頭に血が上り過ぎて、妻も私も一体何のことで口論しているのか分からなくなってしまうことさえありました。三年も過ぎた頃、ついに離婚の話が出ました。しかし私達が辿り着いた結論は、何とかこのまま努力してやっていこうということでした。

だいたい私達の抱える全ての問題の根底に横たわっていたのは中絶のことだったのですが、妻はそのことが分かっていたのかわからなかったのか、分かっていたのかわからなかったのか、その問題を持ち出そうとはせず、そのうちこの中絶の経験がもたらす影響が、私の生活の様々な面でも目立つようになってきたのです。仕事は思うようにはかどらなくなり、何をしても楽しめなくなつたため、友人関係にもヒビが入り、また自分自身に対する不自信感も募るようになってしま

いました。そればかりか健康面でも害し、血圧は上がり、普通ストレスが原因でなると言われるヘルニアにまでかかってしまいました。

そして一九八五年、妻が再び妊娠したのです。しかし妻はこの子もまた中絶しようと考えました。もちろん私も今回は黙って引き下がることはせず、三日間かけた説得の末、何とか妻を思い留まらせたのでした。こうして私達夫婦に息子が誕生したのです。この息子の誕生でわが家に新しい希望の光が見え、万事OKという感じでした。少なくともそう見えませんでした。それとも本当にそうだったのでしょうか。私は息子の誕生に有頂天でしたから、妻にも同じ幸福感を感じて欲しい、この喜びを二人で分かち合いたいと思っていたのですが……。私と息子の結び付き、それは信じられないほ

どの固い絆で結ばれていました。ほとんどずっと息子に付きつきりで片時も離れることなく、あの子を泣かせたことなんてないくらいです。あの子が寝ている時には、スヤスヤと息を立てて眠る姿をじっと見守っていました。甘やか

し過ぎて子供を駄目にしたという言い方もできるかも知れませんが、無理もないでしょう？この子が生まれる前に既に二人もわが子を失っているんですから。この子がその時の私にとっては何でもかまわぬ大切な存在でした。この子は私が守ってやらなければ……そう感じた私は昼間は家にいてあの子の世話をするため、仕事も夜勤のものに変えました。息子の側にずっと付いていてやりたかったので、睡眠時間が30分以下というときさえありましたが、息子のことを思えばそれくらい平気でした。そのうち日に日に、息子のこれからの

生活保護の問題が気になり始め、一度気になり始めたら、その心配に取り付かれたように頭はそのこと一杯になりました。というのも、他の誰が私の息子を守ってくれるというのか、他の誰も信頼することができなかつたのです。息子がハイハイをするようになった時は、そのかわい

い小さな頭を床にぶつけないかと心配で、いつも側について見守っていたものです。歩き始めてからもずっと付きつきりで、一度だつてあの子を転ばせるようなことはありませんでした。あの子のために歌も作り、毎日毎日何時間もの歌をあの子を揺すりながら歌って聞かせたことでした。そのうち、あの子が信用するのは私だけになつてしまったのです。私が食べさせてやらなければ食べないこともありました。そのうち私のお皿にのっているものであれ

ば何でも、またそれしか食べないようにさえなつてしまいました。また私が寝かし付けてやらないと眠ることもしないのです。あの意味では、私の心は妻やわが子に対する愛情で満ちてはいましたが、同時に胸の痛みを感じずにはいられない日々が続きました。このような私の心のうちを妻も気付いていたことでしょう。私の表情や声に出していたでしょうから。

私達夫婦は周りから見たら、一見幸せそうな夫婦に見えたかも知れません。実際そうしようと努力はしていました。が、そんな見せかけの幸せが長続きするわけがありません。息子のとの絆が強くなればなるほど、心の中のしこりをはつきりと感じるのです。妻の犯した過ちを忘れさせてくれないのです。妻の二度の中絶を。妻も私もお互いどれほど苦しんだことでしょう。数年にわたる

苦しみの末、ついにその日  
がやって来たのでした。前  
にも出ていた離婚話を妻  
が持ち出し、私達夫婦はつ  
いに離婚を決意したので  
す。

中絶、その過ちの代償は  
二人の子どもの生命だけ  
ではなく、私達夫婦の結婚  
生活そのものの破壊まで  
に及んだのです。生後38ヶ  
月になる息子の保護権を  
めぐって法廷で妻との激  
しい戦いが続きました。14  
ヶ月にわたる裁判の結果  
は私にとつて受け入れ難  
いもので、権利を得たのは  
妻でした。たくさんの男性  
達が声を大にして自分達  
の考えを主張することに  
躊躇しています。なぜな  
ら、我々男達は自分の感情  
を内に秘めておくように  
とずっと言われてきたか  
らです。男が人前で泣くこ  
となんてできません。男は  
強い生き物ということに  
なっているのですから。し  
かし、実際これこそが、

我々がするべきことなん  
です。我々男達はおおいに  
泣いて、心を開いて気持ち  
を分かち合い自分達が傷  
ついていることを知らせ  
るべきです。もし泣くこと  
を拒否し、心の痛みを分か  
ち合うことをしなければ、  
心の中に閉じ込められた  
痛みが広がって、最後には  
駄目になってしまつて  
しょう。そのことを私は男  
性達に理解して欲しいし、  
肝に命じて欲しいんです。

「男だつたら男らしくした  
ら」と言う人がいます。し  
かし、そんな人達の言うこ  
とに耳を傾けないでくだ  
さい。そういうことを言う  
人達にあなたが耐えねば  
ならない心の痛みや空虚  
感、悪夢を理解することが  
できると思いますか？決

してできやしません。耐え  
なければならぬのは他  
の誰でもない、あなた自身  
なのですから。

ゲイリー・ベルは男性  
のための中絶反対グ  
ループ

「生命を守る父親の会」  
の創立者である。



ビデオ28分 VHS / Beta

「ごらんください。私たち  
は今にも消されようとし  
ている死に直面した胎児  
の声なき叫びを見ること  
ができます。」

(B・N・ネイザンソン)

胎児からのSOS

人工妊娠中絶に対する賛  
否は今や世界中で最も激  
しい論争の一つとなつて  
います。今回、超音波診  
断装置を用いて、中絶さ  
れる胎児の胎内での反応  
を映像にとらえ、「沈黙の  
叫び」として公表された  
ことから、論争は更に加  
熱しています。

新しい生命を  
守るために  
胎児は人間です

二人の愛と受胎

《事務所だより》

雨の季節をむかえまし  
た。雨の日は緑がひときわ  
美しく、思わず窓の外の世  
界にみとれてしまいます。

私たちは、少しずつ新し  
い出会いを与えられながら  
頑張っています。先月は、望  
まない妊娠をめぐるカウ  
ンセリングのパンフレットを  
作り（まだまだ本格的なも  
のではありませんが）地元  
のダイヤル相談員をされて  
いる方々に配りました。ま  
た、現在、聖母の騎士社に  
お願いして翻訳本「中絶反  
対を唱えた一巡礼者の想  
い」を制作中です。夏、秋  
頃には出来上がるのでし  
ょう。先月出したパンフレッ  
ト「貞節のすすめ」「中絶行  
為は女性を解放するもので  
はない」は、早速の反応が  
あり、ご意見、ご感想、励  
ましをいただきました。ま  
た、各一万部という大量注  
文にスタッフ一同びつくり



したのなんのって…慌てて追加印刷それからジワジワと喜びがあふれてきて…。

6月17日は父の日です。子供には必ず母親とそして父親がいます。私たちは、男も女も、大人も子供も、みんなが、ごまかしなしに、誠実に、『生命』とむかい合い、真の愛を見つきたいと願っています。

1990年6月12日

プロ・ライフ・

ムーブメント

スタッフ一同